

八剣山の会春秋

夏季号

平成28年6月20日

「八剣山の会春秋・編集部」発行



＜タムセルク・エベレスト街道より＞ 画・小西益樹

春の山旅

2016年5月30日

高見 毅

毎年、春になると待ちわびたように山旅に出かけたくなる。それは山登りと言うよりは草木の芽吹きや花の開花などの清々しさ、大自然の息吹を肌で感じられるからである。

この2月初めにアクシデントで大事な首を痛め、声帯までおかしくなって苦痛の日々となったが春の山旅の想いはいつもと変わらず、風（天候）を読み好日を待った。

今春（3～5月）の山旅は藤原岳（三重）に始まり猿投山（愛知）、鞍掛山（石川）、納古山（愛知）、池小屋山（奈良）、東赤石山（愛媛）、赤岳（長野）で終結した。この中の数山は長時間歩きのハードなものとなったが病気の苦痛に比べれば、はるかに楽であった。

以下に、この山旅を画像にて、いくつか紹介します。

◆藤原岳 1,144m '16. 3/22



セツブンソウ



福寿草



- ・人の少ない孫太尾根からの往復、頂上近くになると春を告げる福寿草が傾斜地に群落で陽射しを受けていた。（途中は三つのピークがあり約7時間を要す）

◆鞍掛山 478m '16. 4. 6



- ・低山ではあるが北国のため雑木林の中に真白なタムシバの花が多く、山が笑っていた。

◆池小屋山 1,395m '16. 5. 1



シャクナゲの道を進む



ヤマツツジ

- ・台高山脈の主峰を今回は霧降山から派生した尾根から挑戦。最初の急登に苦戦したが稜線は快適、全行程に約9時間を要したこともあり、推奨できるコースではなかった。

◆東赤石山 1,706m '16. 5. 5



アケボノツツジ

- ・高山植物や瀬戸内海の見晴し、そして200名山など四国で人気の山。丁度ツツジ達の季節で山は賑やかだった。高低差1000mの下りはきつかった。

◆八ヶ岳（赤岳 2,829m、横岳、硫黄岳） '16. 5. 19



ツクモグサ



- ・赤岳頂上に立つと富士山、南北中央アルプスの絶景！こんな天気はめったにないよと。また、縦走路に入って“この花はとても貴重なツクモグサだよ”と、花専門の登山者から教えてもらう。この時期のこの山は信じられないほど閑で独り占めだった。

(完)

(俳句) 高取山登山・奥明日香散策から

平成28年4月15日 金城 凡生

高取へ登城嶮しや春の汗
下山して振りかえ見れば山笑ふ
栢の森見えてはためく鯉幟
本丸に立てば国原霞むかな
初燕城下の軒を掠めたり
芽吹く山大観音は見そなわす
苔むして崩れぬ城址風光る
もてなしは春の山菜明日香膳
長閑なり雌綱雄綱（おずなめずな）の飛鳥川
春風に揺らぐ杉の秀（ほ）空青く
遠足の児童一列黄の帽子
麗らかや道々（みちみち）歴史物語
草萌えの国のまほろば地震（ない）来るな
春日差し五百羅漢は笑みたまふ
野遊びや天守無き城広々と
今は無き天守櫓（おぼろ）に浮かぶかな
葉桜やかつてを偲ぶ城の跡
大観音見えて壺坂懸り藤
遅桜（おそざくら）明日香も奥の栢の森
遠霞なれど屹立高見山



雲海と高取城

鯉のぼり揚げて客よぶ奥明日香 高見 毅
若葉して天守無き城広々と
新緑を縫うて天突く山城へ

凜として春光こぼる奥の道 甲斐田博幸
春空へ嬌声跳ねる山の城
山笑う涅槃の仏薄目あく
薫風や岩に五百の顔と顔

里山に温かき風燕くる 安田 亨
本丸や大峰山は遠霞
霞たつ高取山へ向かうなり
春山路苔むす羅漢笑みたまう

山城や放屁するなり山笑う 原 政雄
城垣に若人集う春もみじ

若人の集う山城若葉風 須藤和雄



高取国際高校の生徒たち

以上

私の余生は老い仕度（その 14）

2016.5.20 須藤和雄

連載「私の余生は老い仕度」シリーズ(その 1)～(その 13)の流れは以下の通りである。

- (その 1)創刊号～「死」を語り合う事は大事で良いこと。
- (その 2)13 年夏季号～現在、実践中の積極的養生とは。
- (その 3)13 年秋季号～私は「次第に人生が面白くなる人」になりたい。
- (その 4)14 年新年号～世の中「スマート」流行り、不易流行も大切。
- (その 5)14 年春季号～「幸せ」って何なんだろうか。
- (その 6)14 年夏期号～日本の心＝「和」の精神(日本人の伝統的価値観)とは。
- (その 7)14 年秋季号～日本における死生の行方、「あの世」はどこあるの。
- (その 8)15 年新年号～『老い』の落ち着く処は「自然と触れ合う」暮らし。
- (その 9)15 年春季号～神話、宗教、歴史の現場に触れるのも面白い。
- (その 10)15 年夏期号～「非健康の時の短縮」には厳しい現実があり、暗中模索。
- (その 11)15 年秋季号～老態の自己観察と記録をする事は「生きる原動力」。
- (その 12)16 年新年号～現場確認と記録、そしてシェアすることは心が落ち着く。
- (その 13)16 年春季号～『遂に、来たあ～』と思う自覚と対応策の模索。

まあ、3 年強も続いたものだ。その頑固振りには自分自身が呆れ返っている。
随分いい加減な事をだらだらと書き続けた自覚あがあり、反省もしている。
しかし、下記の記述には『今もそう思う』と信じられる部分もあるので嬉しくなる。

■2013 年秋季号（その 3）

"責めず、比べず、思い出さず"をモットーに「楽な生き方」模索しながら
私は常々「しだいに人生がおもしろくなる人」になりたいと思い暮らしている。
その心掛けは・・・

- A.「見栄・世間体」を最重要判断基準にしない。
- B.他人の良い処を見、悪い処に気付いても批判しない。
- C.気力と体力のギャップを意識し上手く均衡させる。
- D.「忘れることは生きる為の人間の智慧だ」との事、拘泥しない。
- E.積極的に表現して孤独な暮らしから逃れる。

■2016 年春季号（その 13）

最近の暮らしの中で時々思う事だが、「色々な身の回りの便利さ」と「自分の良い暮らし」とは別問題なので後者は夢として追い続けなければならない。

「良い暮らし」とは心の充実度の高低に関係しているよう聞くが賛成である。
心身の一部が経年変化(劣化)してもカバーしてくれる新技術開発が進み、実用化されている。

《例》Windows10 に搭載"Cortana"は 新しい優れたパーソナル アシスタントだと評判の様である。Cortana は、PC 上での検索、カレンダーの管理、ファイルの検索に役立って、且つ持ち主と雑談したり、冗談を言うこともできるとか。
好奇心の趣くまゝに時を刻んで行きたいと考えている私は近い内この環境を整えて見たいと考えている。



■2015 年秋季号 (その 11)

こんなエッセイを書くのは無意識のうちに

「老態自己観察と記録」を実行し老いを見据えて開き直るための行動かも知れない。

"エッセイ"とは日本語で"随筆"、意味は『意の趣くままに感想・見聞などをまとめた文章』とある。日頃感じている「モヤモヤ」の整理が出来るメリットがあるので「独り善がりの作文」と思いつゝも続けてきたがそろそろ「私の余生は老い支度」シリーズの連載を終りにする。

今後は編集長メール《「春秋誌」〇〇号発行と寄稿のお願い》を受信した時、自由な気持ちでその時々思い付いた話題を色々な表現形式でまとめ、寄稿したいと考えている。

(おわり)

本シリーズを終えるに当たり、ちょっと好い話を添えたいと思う。

★これも加齢現象の一つかも知れないが、私にも「望郷の念」があった様だ。
こんな動画を見ると「涙が出てきて、何にも言えねエ」

[山形県 “I gotta YAMAGATA”](#)

★朝の散歩で聴くラジオ放送で「成程！」と思った放送内容がある。
それは東京 FM「感じて漢字の世界」の『鳥』と言う漢字の講釈！

~~~~~

「鳥」という漢字は、鳥が羽をたたんで佇む姿を描いた象形文字。  
古代文字で書かれた「鳥」は、大きな羽と長い尾をもち、凜と立っているよう。鳥は、世界各地で古くから信仰の対象とされてきました。

渡り鳥は時期を決めて一斉に特定のところへ行き、再びやってくる。  
それを、自分たちの祖先が死後にどこかへ行き、鳥になって故郷へ戻って来る様子としてとらえていたというのです。





いにしえの人々にとって、鳥は死者の霊を運ぶもの。  
風にのり、丘を越えてやってくる神の使いでもありました。さまざまな工夫をこらして作り上げた木の上のすみかを、小さな花や色鮮やかな羽で飾りたてて彩りを添える。動けなくなった仲間をつがいで支え、動物や人間の目が届かない安全な場所まで運ぶ。互いのさえずりに耳を傾け、ときに声をあわせて高らかに歌う。  
鳥を媒介にして霊的な世界とつながりながら、地上での暮らしぶりを冷静に観察してきた、いにしえの人々。  
彼らはそこに理想の生き方を見出して、鳥たちを特別な存在として扱い、崇めるようになったのです。  
祖先の霊や神さまとつながっているとされた鳥の姿をかたどった漢字です。さまざまな分野の研究者たちの注意深い観察により、鳥たちが柔軟な知性や人類以上の能力をもつことがわかってきました。  
自然界の現象を解析するだけで、望むところへ渡る。  
道具など使わず食物を調達し、知恵をしぼって子を生み育てる。  
他者への思いやりをもち、美しいものを好み、歌を愛し、野に遊ぶ。  
それは、合理性や便利さを求める余り人類が失った「人間性」そのもの。  
いにしえの人々はその事実に気づき、鳥たちへの共感と畏敬の念を文字に刻んで私たちに残しました。  
漢字のなりたちをひもとくことは、自らの暮らしを省みること。  
人間だけが世界を動かしているという思いあがりにも気づかせてくれます。

~~~~~



あの頃の顔ぶれが懐かしい。
遠い昔の様な感じがする。

宇陀の花めぐり

2016.05.05 木山 裕昭

今年は、ことのほか桜の咲くのが早かったように思います。そうした中、花曇りの4月8日に原付バイクを駆って、市内の花めぐりを楽しみました。



最初に行ったところは、仏隆寺。ここには樹齢 900 年を超える、県下最大最古の桜として天然記念物に指定されている「千年桜」があります。見事な咲きっぷりに、しばし見とれてしまいました。

次に行ったところは、「内牧区民の森」です。ここの嶽神社周辺には約 500 本の桜が植えられ、展望台からは、伊那佐山や鳥見山が一望できます。そして眼前には、まるで桜が雲海のように広がっています。



区民の森から、春風に乗ってバイクが快調に進みます。そして、3つ目の桜ポイントである菟田野の「水分の桜」に到着しました。ここは宇太水分神社に近く、芳野川沿いの堤防に約 100 の桜並木が続いています。

最後は「**狛路の桜**」です。ここは宇陀川沿いに見事な桜並木が続いています。遠くには大和富士を見渡すことができます。ここ篠楽では、万葉集にちなみ、古典的に由緒ある、この地を後世に伝えようと記念の桜を植樹し、「狛路の桜」と命名したと言われています。



天満台を 13 時に出発して、高井の「仏隆寺の千年桜」→内牧の「区民の森の桜」→菟田野の「水分の桜」→ 篠楽の「狛路の桜」と 4 か所をミニバイクで巡り 16 時過ぎに我が家に戻ってきました。行く先々で桜は満開、存分に花見を楽しんだツーリングでした。

そして、忘れてならないのは、別の日に行った、大宇陀の「又兵衛桜」と室生の「大野寺のしだれ桜」です。
やはり宇陀の花めぐりから、この 2 つを外す訳には行きませんね。



(4 月 2 日 又兵衛桜)



(4 月 4 日 大野寺のしだれ桜)

無気味な熊本地震

h.28 年 5 月 8 日 真田一郎

4 月 14 日熊本市内を中心に震度 7 が襲った。その 2 日後には再び震度 7 の本震がとどめを刺すかのように発生する、珍しい連続地震だった。

その後の余震は現在も続いている。

天守の瓦だけでなく、美しい曲線を描く熊本城の石垣も相当に崩れてしまった。加えて、いつ訪れても水面が美しかった回遊式の水前寺公園は湧き水が地震で不調になり池を満たせなくなっただけでなく、この二か所の名所は他に代えられず惜しいことだ。

幸い女房の実家は瓦が緩んだ程度で安堵したのだが、阪神大震災と同様に身近に感じるとともに、我々の住む奈良県にも関わる中央構造線の西端あたりの大分や愛媛まで揺らしたのが気がかりだ。

専門家は、「M7 程度の規模でこの大活断層は誘発されない」とのコメントだったが、仮に「いったん誘発されると成り行きに任せる」ことになるらしい。

発生確率が高いとされる海溝型の南海トラフ地震との関係も気になるところだ。

早期に地震活動が収束して欲しいと祈るばかりである。

阪神大震災から 21 年、列島のほぼ全体が揺れ動いた東北震災から 5 年と徐々に周期が早まりつつあり、改めて日本列島が地震災害大国であることを実感している。

有事の待避場所や親族との連絡方法を今一度見直すことにしたい。

以 上



地震で被害の熊本城

壬申の乱と宇陀（その１）

2016.5.28 安田享

古代の国家を二分して争われ、大海人皇子の勝利に帰した壬申の乱と宇陀市の関係について現地を歩き、感じたところを若干記したい。壬申の乱については、古代最大の内戦であり、潤色があるとはいえ、元となった三人の日記もあり、概ね事実と言われている。当地、宇陀市域を大海人皇子（後の天武天皇）が通過している。この壬申の乱については、出版物も多数ある。地元であり、現地を踏査しつつ、横道にもそれながら気ままに記したい。

日本は、663年、百済の復興救援のため2万7千の軍を朝鮮半島に派遣するも白村江（現在の韓国の南西。公州・扶余を流れる河川）の戦いで、唐・新羅連合軍に完敗する。667年、中大兄皇子（後の天智天皇）は、都を飛鳥から近江大津京に遷都し、河内に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城、筑紫に水城（注1）を造り防衛体制を強化する。防人・烽（とぶひ）を置く（注2）。併せて非常時下の氏族改革やわが国最古の全国的な戸籍、庚午年籍（こうごねんじゃく）を作成するなど国家統治の近代化や中央集権体制の強化を図った。

大海人皇子（天智天皇の同母弟、後の天武天皇）は、天智天皇の即位元年に東宮に立てられた。湯沐（とうもく）という皇太子に与えられた食封（じきふ）＜美濃国・安八郡にあった皇太子の所領、本拠地＞があった。

天智は、最初は、大海人に皇位を譲る意思であったが、最晩年、心変わりして天智の子、大友皇子（後の諡、弘文天皇 母、伊賀采女宅子娘）に皇位を継がせるため、大友皇子を太政大臣とした。兄天智の心中を察した大海人は、天智の病床に侍り、政治からの引退を誓い、吉野山での仏道修行を願い出て、髭・髪を剃り僧形となり直ちに吉野宮に隠居。大津京で天智は、没する。（46歳）

大海人の隠居した吉野宮は、雄略朝に、その後、斉明、天武、持統、聖武、宇多の天皇が、宮滝で改築したとされ、発掘調査もなされている。宮滝の北方には、竜門山がそびえる。山麓の龍門寺には、久米仙人（注3）の神話伝承もある。御嶽信仰がおこり、吉野が弥勒浄土とみなされ、金峰山寺が修験道の聖地となるのも吉野の地が神話的地誌にもとづき、仙境視されてきたことと無縁ではない。

吉野を脱出するまでの半年間、大海人の舎人（注4）は、食封のある本拠地、美濃の安八評（岐阜県大垣市・安八郡）と吉野を頻繁に往来してはた。大海人は、脱出ルートを確認するため、伊賀、伊勢、尾張、美濃の豪族の協力を得るための工作活動を行い、時節を探っていた。結果的に天智の皇子、大友皇子（明治3年の追諡 弘文天皇 在位671～672）

を自殺に追いやることとなった壬申の乱。反逆の戦い。事前に天武が万全の態勢で計画したとは天武の指示で編さんされた日本書紀（以下「書紀」と略す）には、とても書けなかった。近江朝廷側重臣による強制により天武は、止むをえず起ったという形になっている。

近江朝廷（大友皇子）が「先帝（天智天皇）の「山稜築造」と称して美濃・尾張の人夫を集め、武器を携帯させている。」との朴井連雄君（えのいのむらじをきみ 朴井氏は、物部氏の末裔（注5））の報告、これは、吉野攻撃の準備との判断から、672年（壬申・みずえのさる・じんしん）6月、大海人は、食封のある本拠地、美濃の安八評（現、岐阜県大垣市・安八郡）に、腹心の村国男依ら3人を急行させ、①長官の多（おおの）品治（注6）

に蜂起命令を伝え、農民兵の徴発と②美濃の国司を動かし兵士の徴発。③そして東国への要、不破評（不破の関）（注7）の武力による封鎖を指示するとともに672年（天武元年）6月24日、自らも吉野宮を脱出する。

大海人皇子に従うものは、妃（後の持統女帝）、草壁（11歳）、忍壁両皇子、舎人20余人、女官10余人総勢数十人。妃の鸕野皇女（うののひめみこ（注8））が輿に乗るだけで、大海人も徒歩であった。この段階では、軍隊の体裁を成していない。女性も多く、実質は、逃避行に近い体裁で、美濃を目指した。

以下大海人のルートを推測したい。書紀には、「津振川（つぶりがわ）」「吾城野（あきの）」「甘羅（かむら）村」を通ったとある。参考にしたい。

吉野宮・宮滝（宮滝遺跡）を脱出。美濃を目指し吉野川川岸を遡上する。吉野川も宮滝と異なり、菜摘の辺りは、流れが、緩やかである。水量は、多かった。往時は、ダムがなく、流量が現在よりも多かったはずだ。

菜摘の下矢治バス停の手前20mから矢治峠（御峠）越え（注9）となる。矢治峠を越えて津風呂湖に至る。下った津風呂湖の湖畔に津風呂春日神社（注10）が鎮座している。

「津振川」は、津風呂川のこと。入野（しおの）集落から津風呂川に沿って遡上し国道370号に至る矢治峠越えルート。馬は、別途、舎人が手配して峠の向こう側で待つ。（矢治峠越えは、直木孝次郎、菅谷文則、倉本一宏説）

別な道は、入野（しおの）ルートで吉野川を遡上し、吉野町窪垣内（つぼがいと。国栖の手前）から入野に入るルート。このルートは、古来、吉野と宇陀を結ぶ幹線道路である。（国道370号に沿う。矢治峠ルートに比べ2.3^{*}ほど余分に歩くこととなる。窪垣内の標高210m、入野峠280m。集落から峠まで約1キロ。入野峠ルートは、和田萃説）。また大海人に親近感を持つ国栖の里（注11）に近い。現在の入野トンネルは、385m。トンネルの北側で国道370号と県道16号の交点。

- (注1) 水城（みずき） 日本書紀には「大堤を築いて水を貯え、名づけて水城」とある。水を蓄えた防備施設。福岡県の大宰府市と大野城市の境界付近にある。筑紫平野の狭くなっている箇所に設置。全長1.2^{キロ}、高さ13m、基底部幅80mの土塁。
土塁と貯水・外堀。外敵襲来に備えた装置。那の津（福岡）から移転した大宰府を護った。
また、大宰府の北と南に百済の亡命貴族に命じて大野城、椽城を築かせた。朝鮮式山城。対馬から大和まで各所に防衛施設を配備した。
- (注2) 防人・烽 防人とは、サキ（＝辺境）＋モリ（＝守備）。烽とは、のろしをあげて緊急を知らせる施設。防人（国境警備隊）とでセット。危急を知らせる官道山陽道を整備し、馬を乗り継げる駅家（うまや）を整備。
- (注3) 久米仙人 龍門山の龍門寺にこもって修行をした。ある日、久米仙人が空を飛んでいると、吉野川の畔で若い女がふくらはぎあたりまで裾をまくり洗濯をしているのを見て、墜落し、その女を妻にしたという伝承（今昔物語巻11）
- (注4) 舍人（しゃじん、とねり）大化前代の天皇や皇族の近くに侍り、その身边を警護するもの。令制の官人。貴人に従う人。大海人に従った舍人についてみる。書紀には、「名を成さむと欲ふ者は、還りて司（おおやけ）に仕えよ」と再度告げると半ばは、留まり、半ばは、去ったとある。この舍人らは、令制の「東宮（とうぐう）舍人600人」（東宮職員令）に近いもの。地方豪族の子弟。官人（役人）の供給源。後世の大友信友は、「此留まりたる舍人等は、皇子の下心を察りて随ひまいらせむと思ひ定め・・・」、これに対して書紀通釈は、「さる下心ありてにはあらで、年頃仕はれ奉りし御恩誼に報い奉らんとの心にこそあらめ」という。主従には、単なる従属関係を越える絆が生まれていた。
- (注5) 朴井（物部）氏 後の尾張国愛智（あいち）郡、美濃国多芸（たき）郡・安八郡・本巢（もとす）郡には、物部郷があった。
尾張国の尾張大隅、尾張馬身や美濃国の身毛君氏、不破氏などの地方豪族への工作と協力があった（壬申年功臣）
- (注6) 多臣品治（おおの・おみ・ほむじ）は、「湯沐令」（ゆのうながし）という太皇弟（大海人）の直轄地、美濃国安八磨（あわちま）郡の管理責任者。大海人の信頼厚い。百済救援の白村江の戦いに参加した実践経験豊かな武将、美濃、近江で連戦連勝の活躍。日本書紀の編者太安万侶の父か。

(注 7) 不破評(不破の関) 古代の三関(鈴鹿の関、愛発(あらち)の関、不破の関)の一つ。

美濃国不破評の野上(岐阜県関ヶ原町)。都を護るため畿内の境界付近に設けられた関所。反乱者が畿内の外の兵力と結びつき勢力を拡大するのを防ぐために設置。壬申の乱で大海人が、不破評(不破の関)、鈴鹿評(鈴鹿の関)を封鎖し、中央の朝廷と東国との交通を遮断した。これにより近江朝廷の意向が東国に伝わらず、結果的に大海人方の意向だけが東国に伝わり、伊勢、美濃、尾張、甲斐、信濃の豪族の兵を味方につけたことが乱の帰趨を決する重要な意味を持った。

(注 8) 鸕野讃良 後の持統天皇。天智天皇の第 2 皇女。(第 1 皇女は、大田皇女。大伯皇女、大津皇子の母。短命。)天武没後、称制。草壁皇子没後即位。皇居は、藤原宮。孫の文武天皇に譲位後、太上天皇と称し、後見。在位中吉野行幸 30 回。壬申の乱の功労者で次期天皇との声望のあった、天武の第 1 子高市皇子を人臣の第 1 位の太政大臣に位置付けた。これは、とりもなおさず皇位継承者から外す意味もあった。なお、高市皇子には、持統の異母妹・御名部との間に嫡子、長屋王。

大宝二年(702 年)持統太上天皇は、壬申の乱の支持基盤であった三河から尾張、美濃、伊勢、伊賀と 45 日に及ぶ巡行を行い、壬申の乱の功臣とその遺族に報償を贈った。この巡行の 1 か月のち藤原京に戻り「喪葬のことは、努めて儉約に従へ」と詔を残して逝去。遺言により、飛鳥の岡で天皇として初めて火葬され骨は、天武とともに大内陵に埋葬された。

(注 9) 矢治峠 標高 300m の尾根を越える。高低差 116.5m。登りは急峻である。吉野川側の登りが特に急峻である。登り口には、「矢治峠・津風呂湖(近畿自然歩道)」の案内板がある。狭い登り口を登って直ぐ右手に祠がみえる。登りの途中から蛇行する吉野川や菜摘、矢治の集落、更には、吉野の山々が眺望できる。峠の頂上にでると今度は、津風呂ダム、津風呂湖、龍門岳の眺望だ。山道の右手は、採石場だ。峠を下ると春日神社の東、吊り橋の西に出る。津風呂湖は、農林水産省の所管する国営管理ダムである。湖から川になる地点は、入野(しおの)集落である。津風呂川に沿う県道入野河原屋線を行く。入野子安地藏尊にちなむ地藏橋を越え、急坂を上ること 5 分で現在の国道 370 号に出る。津風呂川は、山裾を曲がりくねる。

(注 10) 津風呂春日神社 神社前の説明書きによると吉野郡竜門村(現・吉野町)津風

(注 11) 国栖の里は、紙漉きの里としても知られる。国栖には、耕地の少ない国栖の人々に大海人が養蚕と和紙づくりを教えたとの伝承がある。また、能の演目「国栖」は、空腹の大海人に出会った老夫婦が国栖魚（鮎）を献上し、残った半身を川に放ったところ、不思議にも生き返ったという国栖の伝承に基づく。

浄御原神社では、毎年旧正月 14 日の例祭に国栖奏（くづそう）が奉納される。天武・持統朝に始められた宮中の七節会（せちえ）で国栖奏を献じたため、課役を免じられていた。



北京・上海 カラー鋼板販売の市場調査レポート

2016.5.15 林田俊彦

今回も仕事がらみの最後の海外出張のレポートをまとめる。

仕事の中身をレポートすることはよりプライベートのことと一瞬躊躇するが先に言ったようにこの機会に私の履歴を書き残す。

時 1994（平成6）年5月22日～28日の7日間 小生52歳、部長代理

前回2回のヨーロッパ海外視察旅行と違い今回は100%仕事で中国市場へ進出すべきか？を判断する市場調査を任される重要な仕事だ。

これまでに国内では建材開発部で建材の新規市場（例えば今住宅の外壁で主流になっている窯業系サイディング分野へ進出すべきか？など）で何度か調査しレポートをしているが今回は部内でなく、会社の方向性を左右する案件なので、相当プレッシャーがかかる。

私が選ばれたのは社内で建築出身のトップだからと思う。屋根、壁材の商品開発の仕事をしているから。

社内に海外事業のエンジニアリング部があり、すでにアルジェリアやインド等へ当社鋼板を輸出している、台湾にはすでに同じような合弁の子会社を持ち、台湾市場へ屋根、壁材の設備を導入し市場を拡大しつつある。その後タイや上海に合弁会社ができ、私の部下だった技術者が派遣されている。

同行者はエンジニアリング部係長の福田君（建築出身で友人）とそれに商社のトーマンの2人の計4人だ。交渉相手は前進が北京市建材部で門や窓（門窓公司—もんそうコンス）を生産している会社で我々の会社の屋根・壁材の生産設備を購入してもらい、当社の生産しているカラー鋼板をひも付きで販売する計画だ、もちろん当初は技術指導もする。合弁企業としてふさわしいか判断材料を提供するのが私の役目だ。

当時の中国は経済発展は著しく、北京の空港から市内へ向かう一直線の道路沿いには高層階の建物が続々と建設中で、一目で活気ある状況が見て取れる。

さて北京到着の日は日曜日なので先に観光をする。

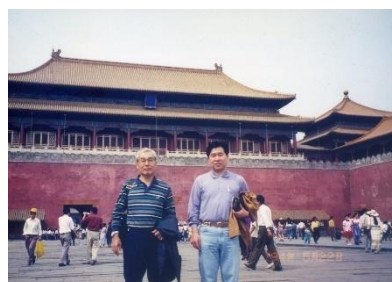
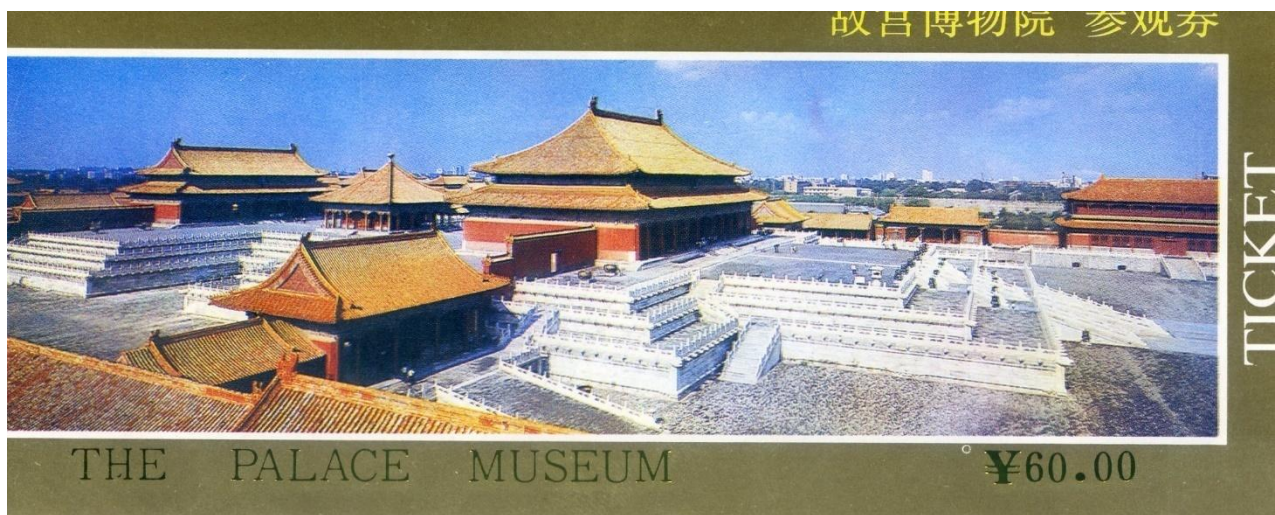
故宮博物院、北京一の観光名所、1406年明の永楽帝が元の作ったものを改築し、1921年南京から北京に都を遷してから清朝最後の薄儀までの皇帝の居城だった。今は博物館になっている。面積725,000㎡と聞き想像できない広大な敷地でびっくり。

宮殿を紫禁城、故宮（故は昔の、古いの意）という。世界で現存する最大の木造建築群、もちろん世界文化遺産で中華民国の国立博物館で、他に台湾と瀋陽にもある。

映画「ラストエンペラー」で御馴染だが1908年12月西太后がわずか2歳10ヶ月の薄儀を皇帝に即位させ、清朝12代の皇帝となり紫禁城に居を構える最後の皇帝となる。

何度か政争の場になったあの有名な天安門は紫禁城の南門にあたる。

なにせ故宮はだだっ広い印象、我々外国人は中国人より入場料が高い、別の門から入る。歴代皇帝が使っていた備品が展示されていた。大理石を多用し、皇帝の椅子がどでかく豪華なのが印象に残る



紫禁城 大和殿トーマンの人と 同行の福田君と 景山公園頂上から故宮を一望
 故宮を通り抜けて景山公園へ行くというより山を登る。これは紫禁城の堀を作った残土を使って山を作ったとか、人工の山で頂上からは紫禁城が一望できる北京随一の景色を堪能できる所だ。紫禁城の真北にあり明、清代の皇帝の庭園となった山、中国という大陸の大きさや歴史の重厚さ体感する。

北京周辺での観光と言えはこと万里の長城だがここに行くには丸1日を要する。

2010年チベットトレッキングの帰りに北京に滞在したがその時も時間が取れず行けなかった。オリンピック開催後の北京は様変わり、街はごみの散乱もなく天安門には兵隊姿も少なく観光客が大勢楽しんでた。

それに京劇、日本の歌舞伎のようなものだが京劇は日本で観劇済み。

宿泊のホテルは北京の一番の繁華街にある京廣中心新世界ホテル、名前がすごい、夕食後北京を代表する繁華街の王府井（わんふうちん）へ出かけ、会社報告用に中国地図を買う。

23日相手の会社訪問、工場見学（工場内は広いが設備らしい機械がまばらで閑散として活気がない）、会議で質疑応答、それに郊外の現場見学や建材の展示場訪問など1日中続く、通訳はトーマンの北京支社の中国人、日本で日本語を学んでいるので流暢だ。

堅い話はこれくらいにして中国らしい話をする。会議中は椅子の後ろに従業員がいてお茶（蓋つきの茶碗）を飲むたびに茶葉の混ざった茶を並々とそそぐ、これぞ日常茶飯事という習慣か、休憩中工場の従業員の使うトイレを探し入ると昔の立ちしょんの溝があり、皆お尻丸出しでかがんで用を足していた。出張前にガイド本で実情を勉強していたので興味があつた。

日本では水洗便所が当たり前なのだと思う。それから市街地の表通りは真新しいビル群が並ぶ

が一つ裏通りに入ると未舗装でほこりムンムンで臭い、道路サイドに側溝はなくあちこちに屋台が並ぶ、とてもこんな所で食えたもんじゃないと思う。

インフラ整備がまだこれからだと思う。高層ビル建設中の足場は竹で起用に組み、危なっかしくて大丈夫かなと思ったり、安全ネット代わりに布やかやのすだれが張ってあったり、相当建設中事故があるように思う。

人命軽視と思うがそこまで政府の対応が行き渡っていない現状を知る。

北京市内の市街地でもまだ自転車が多く縦横に行きかい、信号が極端に少なく、時には馬車で野菜やスイカなど梱包なしで山もりに積んで往来したり偉大な中国の首都かと疑う。

TAXIは日本車が目立つ、工場か政府関係のビルかフェンス一面に赤や白の布にスローガンが書かれていたり、共産圏を思わせる。現場作業員の月給は800元（当時1元1.2円）、一般事務職で1000元（1万2千円）。



建築現場の足場



全面スローガンの建物



朝、自転車通勤か？

夜は超高級レストランで歓待を受ける。もちろん円卓を囲む中華料理だ。玄関入り口まで赤い絨毯が敷き詰められている。先方は会社負担の会食なのでこの機会にかなり見栄を張って構えてくれたように見えた。中国は特に食のもてなしには寛大である。

料理はフカヒレノスープ、北京ダックやコイ1匹の素揚げなどおなじみの料理がフルコースで。老酒、注がれたら飲み干すのが礼儀、酒の弱い小生にはかなり苦痛だ。

社長から皆に高級そうな老酒のお土産を貰う。



22～26まで北京滞在、滞在期間中はトーメンがホテルで夕食を、夕食後はホテル地下の当時流行りのカラオケバーで中国美人をはべらせチップをはずみ飲みながら歌を歌う。

日本語の歌詞カードがある。さすが世界の商社、接待慣れしている感じを受ける。

26日 上海に飛ぶ、トーメンの上海事務所の担当が付き通訳は北京のトーメンの中国人通訳の弟が付く、車で2社の建材の工場見学、金属建材の市場調査をする。

浦東新区の見学もする。

特筆すべきは浦東（ほうとう）新区、原野を開拓し1992年新区を作り大規模開発を行い、現在

は上海新都心となる。大きく4街区に分け、金融貿易区、金橋輸出加工区（付加価値の高い製品を生産・輸出する企業が集積、NEC、シャープ、コダック）外高橋保税区（総合的自由貿易区で輸出加工、保税倉庫、IBM、日立製作所、京セラ）長江ハイテクパーク（バイオ、医学、電子など研究開発型企業の団地（フランスからアルカテル、第一三共）に区分けして整然と並ぶ真新しい企業団地には目を見張るものがあり、日本企業もたくさん進出している。政府が音頭を取り突き進める姿に強大な権力をバックに一党独裁の先見性（共産から自由貿易へ舵をとった先人指導者の偉大さに感心する反面、脅威を感じた。広大な大地と人の資源ある強みとを感じる。もちろん上海浦東国際空港も新設。2010年上海万博の開催地になる

夜の接待は元ヨドコウの下請けに勤めていた中国人と懇意だったので連絡すると歓待してくれる。帰りに掛け軸を土産に貰う。宿泊はホテル日航（nikko hotel rongbai shanghai）

は27日朝から金属建材の製造工場を見学、昼食を兼ねて庭園の豫園（よえん）へ行く、池の上に建つレストラン湖心亭で中華料理をいただく、途中トイレに立つがなんとティシュペーパーが備え付けてない、日本では考えられないことだがどうして処理したか想像に任せる。こんなハプニングも経験する。奇岩を生かした庭園で中国らしい赴きのあるところだが当時、お土産を買うときは目の前で包装するのを確認しないと一元の観光客とみれば店の奥に行ったら別物を包装されると聞く。ましてやカードなど使えない要注意だ。



上海・豫園



奇岩や龍の彫り物もある



上海雑技団

空港の土産店の女子店員は不愛想でそっけない、昔の共産圏の思想が残り気持ちよく接待する気はない。お国の違いを痛感する、機内食も学校で出るコッペパンに似たものでなんとも味気ない。

夜の自由時間初めて2人で上海雑技団のショーを見に行く、劇場廻りはダフ屋がうろうろしつつこく正規料金の数倍で売り込む。

さて仕事に戻って帰国後今度は11月に相手方ミッション社長以下6名を受け入れる。

11月21日から12月6日までトーメンや丸紅が面倒を見る。

ヨドコウでは4日間、本社では社長、重役、関係部署の長を入れてのミーティング、当社の大阪工場見学や南港や神戸のポートアイランドなど金属建材の施工例など案内し送別会を行う。

さて最終結果は契約不成立、その理由については述べないが、社長、判断部署のエンジニアリング部長、私の部署の長や建材部の常務などに判断をゆだねる。

私は少ない時間だったが自分で感じた市場の状況を正確に伝えることと割り切る。

貴重な体験をする。

END

編集後記：＜宇陀なれや朝な夕なのほととぎす 凡生＞＜七つ星蛍袋で包み
し 凡生＞＜梅雨近し笠雲を置く大和富士 凡生＞＜畦刈って残す一輪花あざ
み 凡生＞▲お待ちかね登山シーズンの夏がやってきました、夏季号（第14
号）をお届けします。表紙絵は小西さんの＜タムセルク・エベレスト街道より
＞です。素晴らしい山の絵を有難うございました。エベレストまでは行かずと
も、会員の皆さんと今年も夏山を楽しみたいものです。▲夏山を待てず、すで
に「春の山旅」（トップ記事）を堪能されたのが高見さんです。3月～5月の短
期間に6県7山の登山はお見事でした。仲間のことには触れてないが、全て奥
さん同伴の山旅でしょう。それにしても、その元気ぶりは素晴らしく羨ましい。
数年前私の作った＜山恋へばいつも青春雲の峰 凡生＞の句は、高見さん夫妻
のそれ、そのものですね。▲須藤和雄さんの「私の余生は老い支度（その14）」
は創刊号から途切れることなく寄稿してくれましたが今号で終えることになり
ました。その内容の濃い力作は毎回有難く読みましたが、それを本人が有言実
行に徹していることも素晴らしいことです。余生のことなどのんびり構えてい
た私もお陰さまでエンディングノートや日本尊厳死協会のリビングウィルなど
勉強しました。今後も時に応じたエッセイを寄稿するとのことです。よろしく
お願いします。▲木山さんの「宇陀の花めぐり」も写真付きの楽しい読み物で
した。身近なところにも桜の名所がいっぱいあるのですね。来年の花見にはぜ
ひ其処へ出かけたいです。▲安田さんの歴史もの「壬申の乱と宇陀（その1）」
は、長編3部作の一部です。彼は冒頭にこう語っています。「古代の国家を二分
して争われ、大海人皇子の勝利に帰した壬申の乱と宇陀市の関係について現地
を歩き感じたところを若干記したい」歴史に詳しい彼ならではの（その2）（そ
の3）は秋季号・新年号へと続きます。宇陀市絡みの歴史の勉強するに良い機
会を与えてくれました。楽しみです。今後の記事にもご期待ください。▲真田
さんは4月に発生した「不気味な熊本地震」を取り上げてくれました。彼は改
めて日本列島が地震被害大国であることを実感し、我々も有事の退避場所や親
族との連絡方法を今一度見直したいと提起しています。寄稿有難うございまし
た。▲林田さんは現役時代のお役目柄、重い出張「北京・上海カラー鋼板販売
の市場調査レポート」ながら、中国の人・習慣・街の表情などの話題も書いて
くれています。お尻丸出しのトイレやペーパーを置いて無いトイレ事情、高層
ビルの建設現場で竹の足場が使われていること、一元の観光客とみれば別物が
包装される恐れがあるなど、お国の違いを痛感しての旅物語。興味深いですね。
▲秋季号の発行とご協力のお願いです。原稿締切8月末・発行日9月20日です。
寄稿文については＜寄稿ガイド＞をご参考になしてください。金城記
